

## 甕棺累考：遠賀川式甕棺とその源流

鏡山, 猛

<https://doi.org/10.15017/2335146>

---

出版情報：史淵. 55, pp.25-51, 1953-02-05. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# 甕棺 累考 (二)

— 遠賀川式甕棺とその源流 —

鏡 山 猛

## 目 次

- 一、序 言
- 二、遠賀川式甕棺の實例
- 三、古式甕棺の特性
- 四、繩文甕棺との關係
- 五、朝鮮との關係
- 六、結 語

## 一、序 言

北九州に最も濃密な分布を持つ甕棺の大部分は有名な筑前須玖遺跡が代表する様に、須玖式の名を以て呼ばれる彌生式中期に發達した大形甕を使用したものであつた。前稿「その群團と共有體」に取扱つた遺跡なり、それ等を資料として誘き出した所論も、最盛期の甕棺の範圍を出るものではなかつた。然し甕棺の問題を廣く見渡した時、日本に於てはかなり廣い範圍に繩文式土器の甕棺もあり、大陸から朝鮮半島にかけても同類の遺跡が發見されているので、時代的及び地理的



に北九州の須玖式甕棺の位置を検討して置く必要がある。こゝに問題を彌生式甕棺の起源に限定するも、當然半島のそれと、縄文甕棺と兩者の關連に於て提起、誘導されねばならぬであらう。就中近時彌生式文化の發生に、外來要素の外に日本に根を下して育つた縄文文化の傳統を一つの要因として重視する傾向から考えれば、彌生式甕棺、亦縄文甕棺と近密な關係に於て考察されねばならぬ。佐野大和氏の「合口甕棺について」―上代文化第二十一輯(昭和二十六年十二月刊)所載―の所論の如き、その代表的なものと云えよう。こゝに取りあげる日本の彌生式甕棺の源流に關しては、從來半島經由の傳播路が、より多く論及されて來たのであるが、その資料は必ずしも豊富とは云い難い。これは將來關係資料の増加によつて、問題の解釋は自ら方向を決定されるのではないかと云う豫測さえ持たれる。然し半島の現状では、當分新資料の發見も期待されぬので、從來の資料を整理して置く必要が痛感される。日本の甕棺については、彌生式縄文式の關連も問題とされるのであらうが、私は彌生式甕棺の發生を、問題の中核として提起する關係上、古式のもの―一般にそれは遠賀川式の名で呼ばれる―の實例を擧げて、その性格を一應吟味する必要が生ずる。北九州に於ては、遠賀川式甕棺は近年相次いで發見されているので、これの整理も急がれるのであるが、今はその全部について實査する暇がないので、直接自身で調査に關係したものと、既往の報告書類や聞き書きについて概観するに止める事をお断りしておく。従つて、遺跡の實情が繁雜に過ぎる説明がある一方、單に地名をあげるに過ぎないものもあり簡繁不同である。

## 二、遠賀川式甕棺の實例

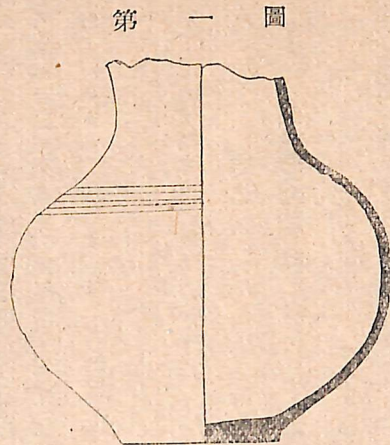
### 福岡市西新町藤崎村上氏邸内

博多灣岸の砂丘地遺跡が、福岡刑務所構内から南邊にかけてあるが、こゝに取りあげる一角は、同所の正門前村上義男氏邸内の古代墓地である。昭和五年七月二十四日の發見後、私は數回現地を訪れる機會があつたが、概要を永倉松男氏に



連絡し、共同して「考古學」第二卷第一号（昭和六年二月刊）に、「筑前藤崎に於ける彌生式遺跡」と題して發表する所があつた。<sup>註</sup>詳細はこの報文にゆずるが、猶當時の聞書きとやゝ相違がある記述があるので、この際訂正と追補を加えておきたい。

村上氏邸内瓶小屋敷地を中心とする甕棺と、石棺の群墓は、當時村上氏に直接出土状態を質問した際、氏は詳細に圖解



藤崎出土卍 (第九號) 三分の一

をして説明された。合せ甕の個數は、六乃至七對とゆう話であつた。何れも口を合せた甕のセットで、東西に横たえられていた。地表から二尺乃至三尺の砂質壤土があり、その下は全く砂層で、甕棺はこの壤土の下端に上甕の尻を位置していた。この甕棺に副えて安置された九口の卍が発見されている。これ等の卍は、平行線、羽狀文、重弧文、連垂文等陰刻されたものがあり、その器形が九州の彌生前期様式遠賀川式に屬するものとして、早く注目されていたものである。右の報告論文には、八個を圖示して一個を洩らしているのを、改めてこゝに追記し併せてその特徴の二、三を補記して置こう。圖にもれた第九號土器は、肩部に五條の平行沈線をめぐらした卍で、高さ一五・八糎、口径、底徑共に六・七糎である。丁度文様帯の部分の裏を見ると、三段の輪積みの跡が明瞭に視はれる。この特徴は他の卍にも見受けられる所で、遠賀川式土器の多數に、又共通する點でもある。口邊部から頸、肩、胴、底部と、特殊な段を見るのもその根源を求めれば、こゝゆう輪積みから生まれた自然の歸結ではないかと思はれる。この遺跡から出た卍の特徴は、底が円盤を取りつけた様に高くなつてゐる點がことに目立つてゐる。今日遠賀川式の名を以て呼ばれる卍は、このうち1、2、3、9の四個の沈線文のあるものと、無文ではあるが、



も共通した器形、特徴を持つている。4、6も頸部やや長く見えるが、やはり底に共通した所が認められるので、同一系統に加えられてよいと思う。ただ第7、8の二例は、中後期の土器で時代的には一應切離して考えねばならぬ。

甕棺は砂地ではあつたが、小破片となつて完全な形で採りあげられなかつたが、その一口が森本六爾氏によつて測圖されている。これは勿論合せ甕の一方であつて、單甕ではない。これにも明に一條の沈線を繞ぐらしている點等は、併出の小形埴と同じ特徴を示しているので、同じ遠賀川式に屬する。甕棺が口邊部がく字形を呈する點で、鏢形口邊と對照的であるが、この甕棺の多くに通ずる特徴を示していることを、特記して置かねばならない。但し全部がこの様式であつたかどうかは斷言出来ない。殊に前記の様に、併出の埴に彌生中後期のものが混在している點から考えても、當時遠賀川河床土器の發見から、急速に進歩した彌生式土器編年に先だつて、甕棺に關する年代觀は森本氏によつて左の様な提案が示されていた。

先づ氏は、甕棺態と機能を區別して、左の如く分類している。

#### A 形態

I 幅廣の鏢形口邊部を有し、形は概して筒形に近く底部小さく、頸及腹部に突帯を繞らすもの。

II 「く」字形口緣部を有し、肩部くびれより壺形をなし、頸及び腹部の突帯が往々刻線を以て代えられているもの。

#### B 機能に就いて棺としての立場から

I 兩甕ほど同大同形で、蓋、身の區別なきもの。

II 確然と蓋、身の別を有し、一口の甕が身となり、蓋は土器でなく石を以て代えられるに至つたもの。

III 一口の甕は小形となり蓋の用をなすに反し、他甕は大にして身の用をなすもの。

甕棺Aの形態第I式は、其の後須玖式の名が一般に採用され、第II式は遠賀川式と云はれる様になつた。而してその組



合せによつて、A[B] — A[B] — A[B]の順序に編年されるを妥當としている。この遺跡に於ける甕棺に就いては吾々は前記報文でA[B]の組合せとなり、A[B]の組合せを見る須玖例に比べて、後出のものであるとの見解を述べているが、これは猶検討を要する問題で、後に更に言及しよう。

扱、以上六乃至七個の合口甕棺の近くに、箱式石棺が三個あつた事が確認されている。

第一號棺は、小形で最も甕棺群に近く、この西南に、鏡と劍の破片を發見した。<sup>註2</sup>南北位の大形棺（約二米）第二號、更にその西南に接して中形棺第三號がある。兩者は隣接して埋藏層位が同一であり、時代の近接を思はしめるものがある。因みにこの遺跡より東五十餘米を距てた字庄からも、一石棺が發見され、やはり鏡と刀身二を出した事がありその北邊現在の縣道からも、數個の甕棺が出土した事がある。この遺跡の特徴として擧げられる諸點を、最後に摘記して置こう。

- 一、遺跡は、甕棺と石棺が密接して埋藏された、群集墓地である。
- 一、方位は、甕棺に於ては概ね東西の方向にあり、石棺は東西位二、南北位一である。
- 一、甕棺は數個の遠賀川式の古式土器である。
- 一、埴類が甕に副えて埋置されている。

#### 福岡縣筑紫郡那珂町板付田端

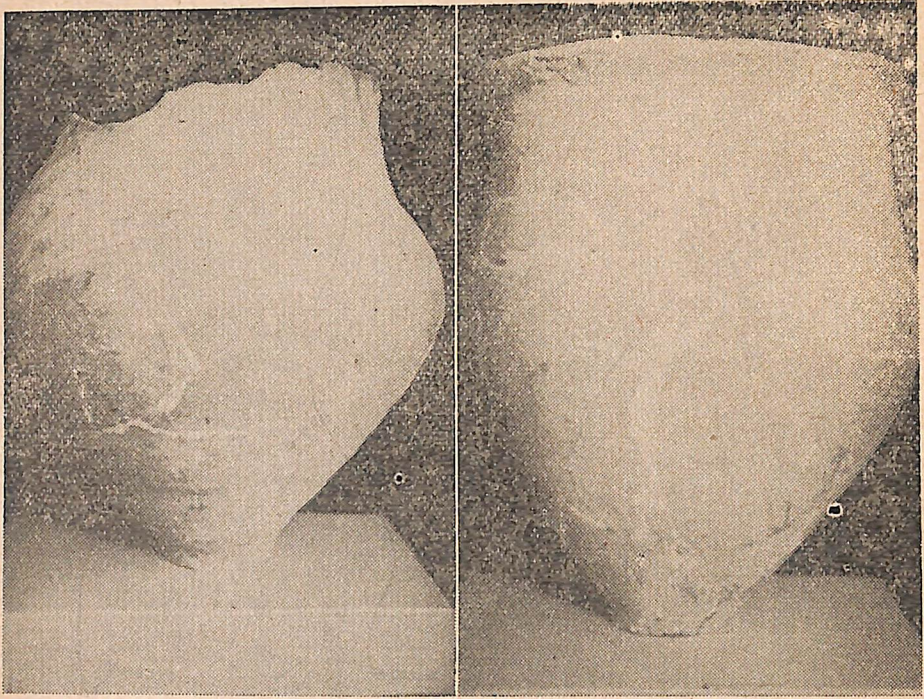
大正五年、土採りの際出土した甕棺内より銅劍三、銅銚三、計六口の發見があつた次第については、中山平次郎博士の「銅銚、銅劍の新資料」として考古學雜誌第七卷第五號—大正六年三月刊—に報告があるが、左にその大要を摘記しよう。

田端民居の地盤は概して周圍田地面より一間内外高く、甕棺のあつた地祿社社地は、民居の一般地盤より高かつた由であるが、當時大部分掘除かれて、その一端に高さ四—五尺許りの小崖面を、遺しているに過ぎなかつたと云はれている。



が、現在ではこの地は、警察署敷地内と思はれ、全く削平されて舊態を覗う術もない。然し中山博士の村人より聞かれた所によれば、その社地は元來二畝餘りの廣さに於て、田地面より一丈餘の高さをもつた円墳狀隆起として存した様で、道路に接した北、及西の兩側は傾斜甚だ急で、田圃に面した南及東の兩側は少しく緩かであつたと云う。この隆起地帯から數ヶ所に、圍りに粘土を填め、二口宛口を合せて横に埋められた口徑二尺許、深さ三尺餘の大甕(甕棺)を發見、その中三ヶ所のものより、六口の青銅利器を見出したと云う。元來この部分には多數の合口甕棺があつて、村人の話によれば不規則に各所に埋没していたと云うから、群集墳墓であつた事は間違あるまい。中山博士は、現地に於て甕棺の破片を採集されて同誌に圖示されているが、須玖式口緣部の特徴を有するもの數片と、遠賀川式口緣部數片を見出されたとある。ここに問題とする遠賀川式口緣部は、彎曲の程度によれば二尺餘の口徑を有したものゝ様で、頸部が外反する特徴を持つこの破片は、或は同一器に屬するものではないかと考えられている。更に甕の腹部破片に横走した四條の平行刻線文も、この口緣部と同じ特徴を持つているので、同一器もしくは同形式—今日の言葉で云えば遠賀川式—の、甕の破片と推定されている。内に朱、及び銅鏽の混じた土塊が固着しているのを認められているから、この式の甕から劍及鉞の或るものが、發見されている事は疑いないとされている。但し、他の二つの甕が如何なる様式であつたか、劍及び鉞の何れがこの式の甕棺から出たかに就いては、不明と云はねばならぬ。現在吾々は、遠賀川式甕棺内よりの遺物發見については殆んど知見がないのであるが、こゝに少くとも青銅利器を藏した一例がある事を、特記して置こう。而して又この甕棺地帯が、円墳狀のマウンドであつた事も注目に値する。但し、これが人爲的な円墳であつたか否かは問題で、恐らく自然の丘陵か或は周圍が削平されて残された自然地形がこの様な状態を呈していたのではないかと推察する。<sup>註3</sup>二畝歩と云えば正円として徑約十六—十七米のものとなる。この遺跡は、現在全く削平されて失はれているが、隣接地の住居址の調査が日本考古學協會の調査事業として、昭和二十六年以降續行中で、やがてこの甕棺地帯と住居地の關係に何等かの手掛りを與える機縁を





A

B

鐘ヶ崎出土甕棺 據竹中氏

齋らす事を期待しているが、今はこの住居趾が古式彌生式土器と夜臼式ユウスと呼ぶ晚期縄文土器を出す遺跡として、斯界の注視を集めている事を云うに止めて置かう。

福岡縣宗像郡岬村鐘ヶ崎上八

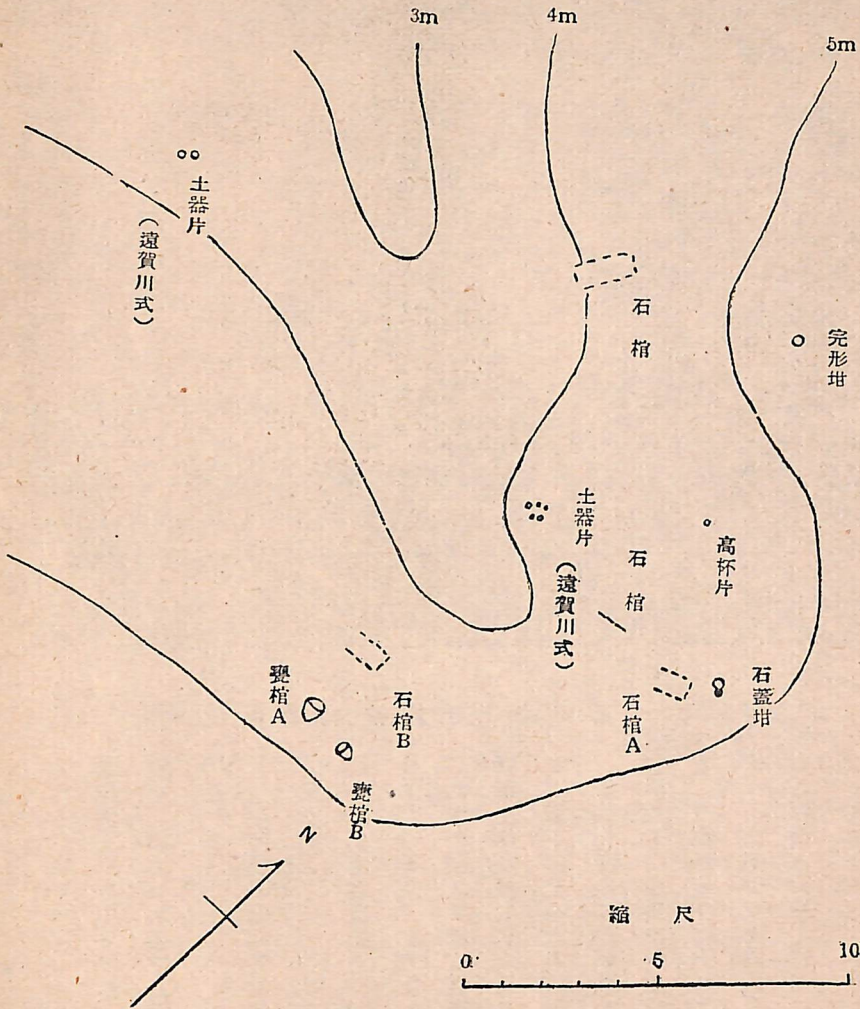
鐘ヶ崎ユウツヨク上八の名は北九州の縄文貝塚遺跡として著名であるが、昨年夏この貝塚から西北約百米の地點に、遠賀川式甕棺其の他が発見され、實査された結果を八幡市在住の竹中岩夫氏より寄せられたので、以下にその大要を紹介しよう。註4

遺跡は海岸に近い砂丘地の松林で、海拔約六米のゆるやかな丘陵頂上に大歳社と云う祠があり、それより西南約三十米、谷の奥づまり附近に土器の散布が認められたと云う。問題の甕棺は二個で、第一號は口を北に向け約三十度の傾斜を



第三圖

甕棺果考(二)



鐘ヶ崎遺跡概觀圖



第四圖



鐘ヶ崎石蓋甕出土状態 據竹中氏

持つ單甕で、内部からは何も發見されていない。かなり現場で破損していたが、竹中氏の復原によれば高さ六一糎、腹徑五一乃至四六糎、底徑一四糎で、肩部に段を持ち一本の沈刻線が繞らされている。口邊部を欠いているが遠賀川式甕の特徴を示している。第二號甕棺は第一號に近接し、その間隔は僅かに八〇糎で口を西に向け、第一號と同様三〇度の傾斜を

持っていた。復原の結果は、

高さ七〇糎、腹徑四七糎乃至

四一糎、底徑一四糎、口徑四

〇糎と推定される。口唇部に

刻目を施し、肩部に第一號と

同様一條の沈線を繞らしてい

る。兩者共に單甕であるが器

形が相似して、傾斜角度から

も甕棺である事は疑ひあるま

ゝ。猶第一號甕の北方一・六

米から箱式棺一基、これより

七・一米を距て、第二號箱式

棺と、更に八五糎を距て、石蓋の甕が發見されている。箱式棺の第一號は、十五個の平石を以て形作られ、側壁の一方は欠除しているが長さ一・六米、幅六五糎、第二號は、同じ様に壁の一方は欠除しているが現存部の長さ七八糎、幅五五糎である。次に石蓋甕は水平に埋葬されていたという。自然石の石蓋が正しく口を蔽っていたというから、倒壊してこうい

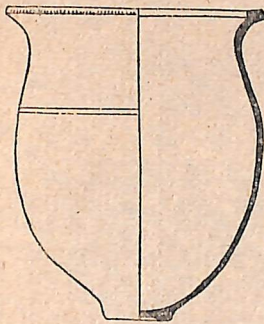


う姿となつたとは考えられない。元來石蓋の横臥埴を埋藏したものと考えざるを得ない。この埴の口縁部と頸部のくびれ目には強い段を持つてゐる。高さ三三三種、腹徑二九種、口徑一七種という。この石蓋埴を見て先づ頭に浮ぶのは、奈良縣宮瀧の遺跡に於て發見された石蓋の埴である。その埋藏の特殊性から甕棺の如きものではないかとの推論を、調査者末永雅雄氏は下されているが、九州では全く最初の例で、甕棺と箱式棺が伴つて發見された事は、この推測を支援する資料ともなるであらう。埴を横臥する所に甕棺と共通した埋藏様式がうかがはれ、同郡内では東郷町釣川遺跡に近似の埴を見る事が出来る。猶この地域には彌生式土器片が散布してゐて、多くの遠賀川式土器—連弧文羽狀文等の刻文あるものを含む—と、少量の須玖式—丹塗高杯等—を認める事が出来る。猶一個完形に近い遠賀川式小形埴が出土してゐる。これ等は表面採集であるから明かに断定は出来ないが、居住地と推定する事も可能であらう。完全な學的發掘によつたものではないから斷言は出来ぬが、一つの小家屋集團と、少數群墓地の例に數えられよう。

## 福岡縣糸島郡芥屋村新町

この地は糸島半島西海岸砂丘遺跡で、貨泉を出した小富士村御床松原遺跡の土器は、彌生式中期タイプピカルタイプと云はれるが、これに連續する芥屋村新町からも多くの彌生式土器破片が採集される。表面採集によれば遠賀川式より須玖式、下つて須惠器の類までであるが、その一部に遠賀川式甕棺墓地のある事を早く中山博士が注目され、「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就いて」(一)—考古學雜誌第七卷第十號所載大正六年六月刊—なる論文に

第五圖



新町出土甕棺 (二十分の一)

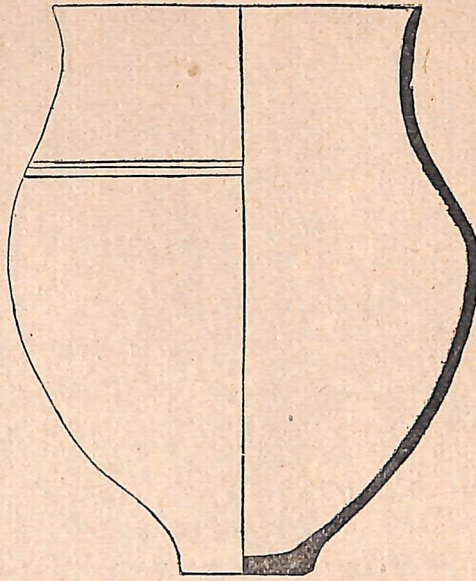
紹介されている。

即ち新町裏の耕地に於て地下げの際發掘された大甕を實見され、後實測圖をあげられている。その一つは口徑六四・五



糲、高さ八〇・六糲、底徑一六糲、口縁部の下稜のみに刻目を有し、腹部の上部に二條の横線を繞らしている。この甕は少しく小形の甕と口を合せて、斜に土中に埋存し、圖示せるものは上甕で下甕は失はれていたと云う。この大甕と同じ地點から出た甕は尙三個あつて、何れも口邊部を打欠いでいるが、共に遠賀川式の埴形土器と推測される。この外同所から

第六圖



中原出土甕棺（二十分の一）

多數の小形土器が出たが、各人が持ち去つて所在を失し、ようやく小埴一個を實測されている。廣口の埴で肩部に貝殻施文が見られる。遠賀川系土器に往々見受ける施文法である。右の記述によれば少くとも數個の遠賀川式甕棺と、これに伴出した同系統の小形土器が存在した事は明かである。

佐賀縣東松浦郡鏡村（舊久里村）中原

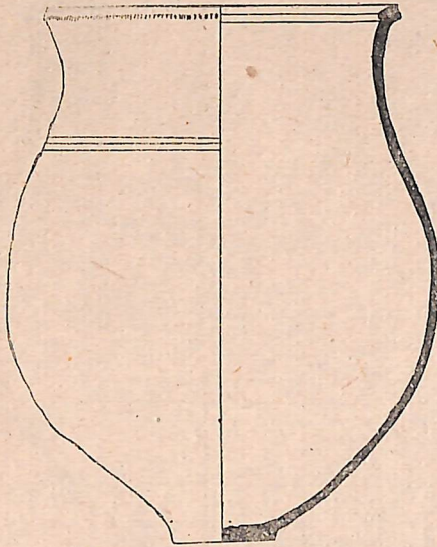
昭和五年六月發見のもの、松浦史料第一輯に、龍溪顯亮氏の「金石併用期に於ける唐津地方の遺跡と遺物」なる論文に引用されている。久里小學校北方民家の庭前より發掘されたこの甕は、合せ口（報文には差合式

と云う言葉が使はれているが合せ口を挿入式と區別したものと思はれる）の下甕で上甕は破片の爲口邊部の一部が採集されてゐるに過ぎない。中から大腿骨の腐朽したもの外、何にも發見されていない。この附近に甕棺の群落地があるらしいが、今はその一例が報告されているだけである。この甕棺は口頸部が直立に近く反りが少く、口唇部も厚みをなしていない點に、やや遠賀川式土器としては特異な感を受けるが、肩部に三條の沈線を繞らしている點、肩部内面に輪積の痕を



残している點等はこの時期の一つの特徴と考えて差支ないと思はれる。猶胴の下部には焼成後の穿孔があるが、甕棺としては中期のものに時折り見かける所である。口径四八糎、底徑一六糎、高サ七四・三糎、上甕の推定口径六八糎口唇断面は如意棒形を呈する。

第七圖



柏崎出土甕棺(下甕) (十分の一)

## 佐賀縣東松浦郡鏡村柏崎

柏崎貝塚は早く昭和三年の頃唐津史談會有志の調査が行はれて、前項引用の松浦史料の龍溪氏の報文や、佐賀縣史跡報告書第二輯(昭和五年三月刊)に收められた吉村茂三郎氏の報文があつて、貝塚に接して甕棺地域のあつた事が注意されている。最近昭和二十六年八月には日本考古學協會、九州文化綜合研究所、佐賀縣教育廳の協同調査が行はれたのであるが、その概要は既に調査主任を承はつた私が佐賀縣文化財報告書第一輯に、「柏崎貝塚調査概報」として一應發表しているのでこゝに引用する迄もないが、元來その發掘を企圖した最初の目標は繩、彌兩式土器の關連性

を追求する事に重點を置いたのであつたけれども、結果に於てはこの目標を満足させる資料よりも、遠賀川式甕棺の發見と須玖式土器と遠賀川式土器の層位的發見に伴つて、兩様式の土器に伴出する石器の區別といつた點に多くの成果を齎したのであつた。殊にこの甕棺は色々の意味で甕棺の起源問題に興味ある材料を與えてくれる。僅か二・五米に八米餘のトレンチで充分な調査とは云い難いけれども、隙かに上層の須玖式土器と下層の遠賀川式土器を判別出來た事實は特記さ



れねばならぬ。このトレンチ内で發見された甕棺は二つで、第一號甕棺は合口で側に埴形土器を伴い、第二號甕棺は單甕らしく極めて小破片になつていた。但し何れも遠賀川式土器に相違はない。ただここに特異な點は甕棺の底面が、基盤層の水平上面を切り込んでいない事が注意された。而して第一號甕棺の上面は須玖式土層の表層に近く位置していた。通例甕棺を埋藏する場合は土中に擴を穿つて挿入するので、當時の地表よりも若干下つていたのであるが、若し擴を穿つてこの甕を埋藏したと假定すればその時期は上層の須玖式の時代となつて土器様式の矛盾を來すこととなる。これを合理的に解釋しようとするれば、自然甕棺の埋葬された時代を下げるか、或はこの甕の上を堆土で蔽うマウンド式の埋葬法を考えねばならぬのであらう。この甕棺は後述の如くその特徴として早期甕棺の様相を持つものであるから、推論として後者の立場をとる方が妥當ではないかと思つてその旨を述べ、類似例として前記の板付の例を引用したが、それは板付のマウンド例は前にも述べた様に、甕棺埋葬時に盛り上げられた堆土であるか自然丘陵を利用したものであつたか問題で、若し後者の場合とすればこの例證にはならぬのである。然し柏崎例が傍例がないからと云つて前の推論を取消す謂れはない。加えてこの甕棺が早期甕棺の様相を持つ諸點は左の如き性格を持つからである。

一、繩文關係の埋葬例としても地上に墳丘の如く目標となる様なものは残していないが、ただ千葉縣姥山貝塚から昭和二年東京帝大人類學教室の調査によつて發掘された人骨は、その上に黒色土が土饅頭の如く覆つていたと云う。

二、立地に關して、盛期の甕棺が住居地に近接し乍ら高燥の地に位置する傾向があるが、これは推定住居趾よりも低位にあり貝殻棄場に近い場所にある。

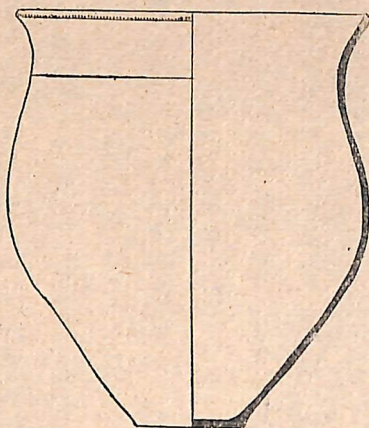
三、燧火に關して、第一號から採集された人骨は、九大醫學部の金關教授を煩はして七才位の幼兒と推定して頂いたので小形甕にふさわしいが、第二號甕の圍りには木炭塊が著しく散布し繩文文化晩期の埋葬例にある様な焚火の痕跡を推考出来る。



福岡縣京都郡犀川町大字本庄

犀川町小學校の敷地から南の溜池にかけての一帶は古式群集墳墓地で石棺、石蓋土壙、甕棺が多數分布している。このうちに甕棺は池の邊りから出土し小形の冢と深鉢を合せ口にしたもので、全く胎兒しか容れられない様な大きさである。遠賀川式冢は肩部にフ形の連續陰刻文をつけている。猶箱式石棺には成人を収め得る大形のものもあるが小型のものも數例注意されてゐる。

第八圖



立岩出土甕棺 (十分の一)

福岡縣糸島郡怡土村石ヶ崎

支石墓で有名な石ヶ崎の墳墓遺跡である。遠賀川式甕棺が中期のものに數個交つてゐる。<sup>註8</sup>

福岡市(舊糸島郡)今津

海岸砂丘地より發見されたもので小形甕が糸島高校に所藏されてゐる。<sup>註8</sup>

福岡縣飯塚市立岩字堀田

昭和八年十一月市營グランド工事中幾多の甕棺が發見され、中山平次郎博士の調査報告もあるが、<sup>註8</sup>その頃現場を訪れ市役所で遺物を實測した中に一例の遠賀川式甕棺を見出した。高さ五五糎、口徑四六糎、口唇下端に刻目を施し頸部に細線一本腹部に一本沈線を繞らすこの甕は、地表より約六六糎下に四十度前後斜に埋藏されていたのである。

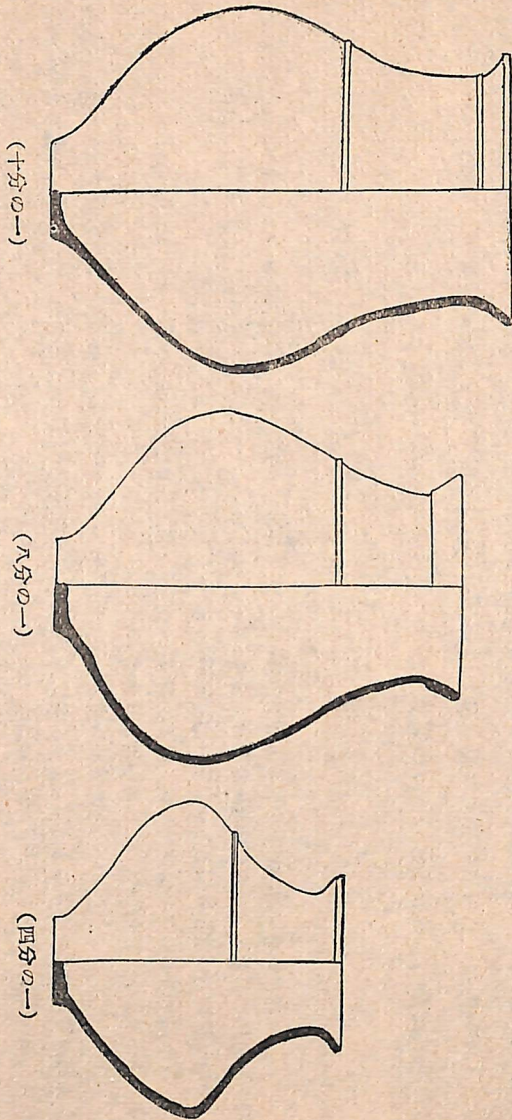
宮崎市庵ノ山榿中學校庭

宮崎市の東南海岸砂丘地に近年中學校の新築工事が行はれた際、彌生式の遺跡が發見され斜に埋められた完形單甕を堀



り出し、現在宮崎縣立博物館（元宮崎神宮徴古館）に出陳されている。私は昨夏同地に赴いた際實測を行い、同時に採集されて櫛中學校に所藏されている土器片の實測を縣立博物館の宮里孝信氏に依頼したが、同氏の好意によつて遠賀川式土器である事を知つた。博物館出陳の甕は埋葬位から甕棺と推定されるに止り、以上筆者の管見に入つた遠賀川式甕棺が凡

第 九 圖



遠田土甕棺（左端）及埜（右二個は據宮里氏）

て北九州に偏在しているために、これが事實とすれば南九州の飛びはなれた一つの新例を加える事になる。

甕棺は口徑三六種、高さ五九種、口邊部と肩部に凸帯をめぐらしている。通例ここに沈線をめぐらす所であるが凸帯も



亦稀に同じ位置に現れる場合がある。底部に近く朋切の下端に孔が開けられている。伴出の彌生式土器の器形の判明するものも同様な特徴を持ち肩部に低い凸帯をめぐらし、他の破片にも肩部に段をつけるのがあり、北九州のそれと似た形態を示している。

註

- 1 本報文は永倉の執筆にかゝるが土器に就いては左の論文がある。森本六爾氏「筑前藤崎の彌生式土器」考古學第五卷第一號所收。
- 2 中山平次郎氏「古式支那鏡鑑沿革」考古學雜誌第九卷第三號所收。
- 3 中山博士は古墳時代の墳丘の起源をこゝに求められている。
- 4 砂探り作業に伴つて撤去される所を救はれた竹中氏の努力により資料及寫眞を提供された好意を謝す。
- 5 末永雅雄博士「宮龍の遺跡」奈良縣史蹟名勝天然記念物調査報告第十五輯。
- 6 昭和二十三年福岡縣に於て調査されたが近刊の考古學雜誌に原田大六氏の報文が掲載される豫定と聞く。
- 7 岩波寫眞文庫「金印の出た土地」に寫眞がある。
- 8 中山平次郎博士「飯塚市立岩運動場發見の甕棺遺物」福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告第九輯。

三、古式甕棺の特性

遠賀川式甕棺と須玖式甕棺が相對的に前後關係を指示する事は近時の常識となつた感があるが、絶對年代に於て同時併行の時期もあつた事は少數の例からではあるが推測出来る。その第一の例は森貞次郎氏によつて指摘された兩様式埴の合せ口甕棺が存在する事實である。<sup>註1</sup>その第二例は森本六爾氏によつて注意された須玖遺跡に於ける下層に須玖式、上層にく字形口邊部の甕棺が存在したと云う事例である。<sup>註2</sup>従つて前にあげた諸例が凡て須玖式甕棺より前期に位置するものと限らぬであらう。けれども須玖式甕棺に比べてその數の極めて少い點は、これ等の幾つかが兩者共存の時代にあつたにしても先行様式と認めるに困難を感じない。更にこれは甕棺のみに限定されず一般の兩様式の前後決定に従うべきであらう。

扱以上あげた諸例に於て遠賀川式甕棺が示す特性は如何なる點に求められるであらうか。その前に遺跡に於ての遠賀川



式甕棺の單純遺跡があるか否かを調査しておこう。これは遠賀川式土器のみを出す單純遺跡が極めて少い事に對比して、甕棺遺跡も亦遠賀川式のもの極めて少い。前述の諸例に於ても兩様式混在の遺跡は前記の板付、立岩、藤崎の外にその例が數えられる。例えば

佐賀縣三養基郡田代町大字柚比安永田

福岡縣三潁郡三潁村塚崎

福岡市平田

註。

の如き遺跡に於て優位を占めるは中期以後の甕棺で、極めて少數の遠賀川式の甕棺が伴出するにすぎない。この他の新町、中原、柏崎遺跡の諸例は、極めて調査の範圍が限られているので果して單純遺跡か否か明かでない。

かくの如く兩系の甕棺遺跡が重複するとすれば兩者の立地條件の區別はつけ難くなる。高低差の少ない砂丘遺跡―藤崎、新町、中原―や円墳狀高臺地―板付―の如き同様の個所に於て盛期の甕棺が占める地形と變りがない。ただここに再び想起したいのは柏崎の遺跡で、ここに於ては現在の畑地面より一米下に埋藏された甕棺の底面が往時の墳墓地と考へる時は、將に貝塚の推積に移らうとする位置に存在する點が殊に興味を惹く。住居地域を柱穴の存在によつて推測すれば、貝殻の遺棄された傾斜面と住宅地との狭い空地がこの墓域と考へられる。住居地に近く不用物の廢棄される場所に墓地が存在する事は、墓域に對する神聖觀念が未熟な事を物語るものであるまいか。繩文時代の人骨が示す墳墓地の立地にこうゆう住居と隔離されない無關心さが認められる事は屢々である。彌生中期の遺跡に於て墓地と聚落の間には人爲的な溝渠によつて距てられ、或は低地に住居があつてより高い丘陵或は臺地上に墓地がある事は、かつて屢々例を引いて述べる所があつたからここに再び繰り返さないが、死者永劫の眠の地墓域と、現身の人々の住む場所が次第に隔離して行く傾向が求められなくもないであらう。かつて多くの人々は甕棺の蓋の出現に甕棺年代決定の一つの據點を求めた。即ち甕棺の合



口様式から次の様な分類を試みた。

Ⅰ 二口の甕がほぼ同形である例

筑前須玖遺跡の例がよく引用される。

Ⅱ 上甕が浅く蓋本来の意味を持つ例

これには元來蓋として製作されたものと淺鉢などを利用したものがある。

Ⅲ 石蓋又は木蓋の例

これは腐朽するので無蓋單甕と云うけれども元來は木其の他の植物物質で被覆されたものと考えるのが妥當であらう。

右のⅠⅡⅢの順序に従つて變遷を辿つたと云う。<sup>註4</sup>

これには須玖遺跡に於て第一式が優位を占めてこれより分布周邊に至つて第二、第三式が多いと云う地域差から來る立場もあり、吾々もこゝに中期から後期にかけての一つの地域に併行した年代的な變相と認めることにやぶさかではないが、同型合口様式を最古となす理論的な根據を知らない。前にあげた遠賀川様式の甕棺に就いてはこの三つの形式を夫々持つていたのである。更に一部の論者は單甕を以て原始形式としてゐるが、その實例としてあげられたものは合口甕棺である。ただ一方の甕が破損し或は失はれて圖示されないものであるが元來の單甕ではないのである。遠賀川式甕棺に於てはやはり合口甕棺のあるパーセンテージはかなり大きく、一方の甕が小さい場合中には下甕が上甕より小さい例もある同大のものもある。初期の甕棺が單甕より發達したとゆう論は、彌生式に關する限り未だ實證されない理論である。

次に副葬遺物に關して、遠賀川式甕棺より發見された例は至つて少く、僅かに板付に於て青銅利器を出した事實しか知らない。これとて細形の銅劍か銅鉾か判らぬが少くとも中國傳來の鋒の狭い部類に屬する事は疑なく、これ又盛期の甕棺内發見青銅器と鑑別出来るか疑問である。猶甕棺に伴出する埴は前稿の甕棺と祭祀の項に考察した様に中期の甕にも認め



る事が出来、遠賀川式甕棺に於ても藤崎、新町、柏崎例の如く多くの類例を見るのである。この點は一方縄文遺跡に對比して考へる時は重要な意味を持つて來るのである。日本の石器時代墳墓では一般に副葬品と稱すべきものなく、土器の伴出も河内國府の小形古式縄文土器が屍體に副えられた例をあげるに止り、その間に必然的な相關關係を求めざる事は困難であらう。數えてここに至ると、果して遠賀川式の甕棺と須玖式甕棺が本質的にどの程度の差異があるか判然としなくなると。ただ前期様式甕棺が少い事と、盛期の物に比べて大形甕と云つても、深さ一米をこすものがほとんど無い點は古式甕棺の特性として數えあげてよいのではなからうか。

地名	甕別	口徑(糧)	高さ(糧)
藤崎		26.4	48.5
板付		約 60	
鐘ヶ崎	第1號 單甕	40	61
	第2號 單甕		70
新町	下甕	64.5	80.6
中原	上甕	68	—
	下甕	48	74.3
柏崎	下甕	46	70.0
立岩	單甕	46	55
櫛	單甕	36	59

變化を示していない。彌生式甕棺の習俗一般は、收められる屍體の長幼の差を除いてはほとんど彌生前期に於て確立されてきたと云つても過言でなからう。

かかる小形棺は洗骨や火葬の徵證がない限り、嬰兒又は幼兒の棺としか考へられず事實幼兒の骨を出した柏崎の例もある。この小形甕が多いと云う事實は、土器製作の技術が未熟で、大人を入れるに足る大甕が出来ない事に主因を歸すべきではなからうか。同じ理由によつて縄文甕棺が又小形であつて、幼少兒の收葬の具に供されていた點を顧みなければならぬ。僅かの點を除いては彌生式甕棺全體の位置で、特に遠賀川棺は盛期の甕棺の特性の多くを既に持ち得たのであつて、その發展段階に於ては大した



註

- 1 森貞次郎氏「古期彌生式文化に於ける立岩文化の意義」古代文化第十三卷第七號所收。
- 2 森本六爾氏「北九州彌生式土器編年」考古學第一卷附錄昭和五年刊。
- 3 中山平次郎博士「福岡地方に分布せる二系統の彌生式土器の調査」
- 4 福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告書第七輯所收。
- 5 島田貞彥氏「筑前須玖史前遺跡の研究」京都帝國大學文學部考古學研究報告第十一冊

#### 四、繩文甕棺との關係

繩文文化期に殊に晩期に幼兒屍體を甕に收める風習が存する事は早くより知られている。<sup>註1</sup> 從來知見に入つた例は

熊本縣下益城郡豊田村御領貝塚

岡山縣淺口郡津雲貝塚<sup>註2</sup>

滋賀縣坂田郡春照村杉澤<sup>註3</sup>

愛知縣渥美郡田春町吉胡貝塚<sup>註4</sup>

愛知縣一宮市馬見塚<sup>註5</sup>

岩手縣氣仙郡赤崎村大洞貝塚

宮城縣牡鹿郡稻井村沼津貝塚

最近大分縣直入郡管生村禰宜野より發見された合せ口の甕棺もこれ等の系列に入れてよい。この遺跡は大分大學佐藤曉君等の調査になり、その破片を接合復原して大分大學に出陳されている。同君等の言によれば下甕が直立して上甕が伏せてかぶさつていたという。

繩文晩期の甕棺は深さ三四十糎程度の小形の而も單甕が多いのであるから、これに收められた屍體も殆んど早産兒か幼



兒であるとの報告がされている。但し愛知縣馬見塚、滋賀縣杉澤の二例の如きは合口で彌生式合口甕に似ている爲、彌生式甕棺の影響をうけた結果と考える學者もある。その器形は兩者共繩文末期に近く近似した姿がみえるのでこの論もあながち否定出来ない。馬見貝塚及び杉澤の甕は何れも深さ三十五糎乃至四十糎程度のものであるから、合せて七十糎を越えるものでないのではやはり洗骨、火葬骨の收納でなければ幼児の甕にするより外ない<sup>註6</sup>。

然し大分縣の新例によつて、合口甕はその位置が直立と水平の差はあるにせよ、未だ合せ口式の甕棺を全部彌生の影響とするには躊躇を感じしめる。繩文式甕棺に於ける單甕より合口への移行過程は、古期即ち遠賀川式單甕より合口への移行過程と併行的な關係に於て理解出来るものではあるまいか。

繩文晩期に於て單甕より合口甕が生れても、未だ合口式が絶對多數を占めるに至らず終末期に於ても單甕と複甕と併び行はれていたのであらう。この頃彌生式早期の甕棺がその葬法を同じくして、單なる土器様式の變化の下に出現したと考える事が出来ないであらうか。この考案は前の繩文晩期のそれが彌生の影響を受けたとする所論の正に反對の方向を指示する観がある。この兩説の對立は暫らくそのままにして、何れにせよ繩文晩期の甕棺と彌生早期の甕棺の性格について、類同性と異同性に就いて今一應の検討を加える必要を感じる。

第一に大きさの問題であるが兩者共に小型にして幼児を容るるに足るけれども、成人は屈葬としても困難である點。

第二に甕棺葬が普遍的な性向を持つものでない。即ち發見例が稀である。遺跡に十を越える群を見出す事が出来ない點は類同性として認められてよいであらう。

對同性に就いて問題とすべき點は先づ兩者の分布である。遠賀川式土器は近時の調査によれば、南九州から伊勢灣沿岸に至る範圍にほぼ同一の様式を保つてゐる事が明かにされて來た。この事象にかかわらず遠賀川式甕棺は上述の如く、北九州の漸次増加する資料を數えれば地域的に限定される傾向にある。日向の例や確信を以て甕棺と斷言し得ない一二の例



を除けば、現在の所彌生初期の甕棺は北九州に獨占される姿に置かれている。一方縄文甕棺は九州より東北に至る間に普遍的な分布をみせている。反つて遠賀川式甕棺の濃厚なる北九州に於て縄文甕棺の發見を聞かない。この事實に立脚すれば反つて遠賀川式甕棺の發生は強い縄文甕棺の影響と傳統を受けついで地域に於て起つたものではないと言はざるを得ない。ここに地域的に近接した朝鮮半島の諸例が顧みられなければならぬ。

註

- 1 清野謙次博士「日本石器時代の甕棺葬」日本民族生成論。長谷部言人博士「石器時代の死産兒甕葬」等参照。
- 2 備中國淺口郡津雲貝塚發掘報告 京都帝國大學文學部考古學研究報告第五冊。
- 3 小林行雄、藤岡謙次郎、中村春壽「近江坂田郡春照村杉澤遺跡——繩文式土器合口甕棺發掘報告」考古學第九卷第五號。
- 4 昭和二十六年の發掘調査の結果は埋藏文化財發掘調査報告第一「古胡貝塚」として刊行されている。
- 5 森徳一郎氏「尾張貝塚甕棺群の真相(二)」史蹟名勝天然記念物第六葉第七號。
- 6 「古胡貝塚」では成人骨を容れた小形甕の新例が發掘され中山英司博士は洗骨の風習の存在を推考されている。

五、朝鮮との關係

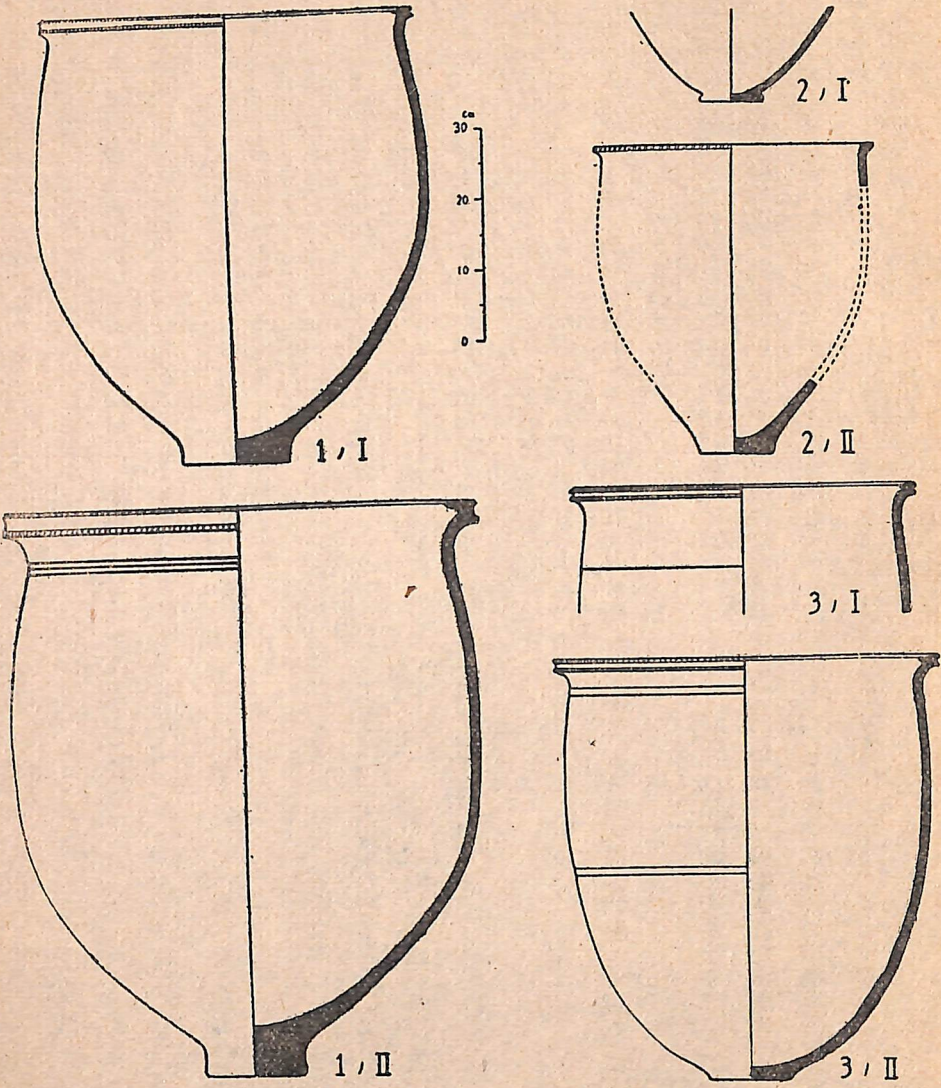
北九州の甕棺を問題とする時屢々とりあげられるものに朝鮮半島の甕棺がある。ことに金海の甕棺は榎本龟次郎氏の報告によつてその概要を知る事が出来る。<sup>註1</sup>

一、慶尙南道金海郡金海邑會峴里

貝塚の一角から發見された甕棺は三個で、箱式棺五、支石墓と共に僅か四十餘坪のうちから各様式の墳墓が群在して發見されている。甕棺は三個とも彌生式土器殊に遠賀川式の特徴を具えている。第一號は長軸をほぼ東西におき、東をやや高くして斜位をとり、第三號はやはり長軸を東西にピット内に殆んど水平に埋藏され合せ目は挿入式である。第二號は直



第十圖



金海出土甕棺 據榎本氏



立した甕に口を合せて上甕が伏置された形をとる。

第一號甕には銅製品の銹化したものが附着していたという。

第二號甕から碧玉製管玉と甕の下から細形銅劍二、青銅刀削五が發見されている。

石棺は箱式石棺で五基中四基が小形である。その大きな石棺の中より石鏃二、土器一個が發見された外は副葬品を認める事が出来なかつた。圖によれば第五號石棺が大形の外は四棺共に小形である點が注意される。又これ等の石棺群を限界づける様に石臺が設けられている事も特異な事である。

圖についてみると、口邊部の刻目といひ胴部の沈線といひ器形の類似は、ことに柏崎、新町例等にみられる特徴を示している。この點に關して榎本氏も「北九州の甕棺と全く合致するというよりは同一類のものたるを示している。彌生式系土器及彌生式文化の半島に於ける存在を明確にした事」を言明されている。而して箱式石棺と甕棺の共伴も、現に吾々は藤崎上八等に於て來て來た所であつた。尙朝鮮では東萊の貝塚に合せ口甕が發見されている。<sup>註2</sup>

#### 慶尙南道 東萊

東萊邑東の貝塚に近い南面の傾斜面に四個の甕棺と一個の石棺の出現が報告されている。

大形の甕の口も合せて水平に埋葬しその一個から彌生式土器に酷似した埴一個と鐵製環（指輪）を發見している。長頸の甕の兩側に角形の把手をつけたものがある。

更に南鮮地域で全羅南道羅州郡潘南面の三國時代の甕棺式の墳墓もあるがこれは年代的にもかなり降下したもので、こゝにとりあげている起源の問題には直接のつながりを持たぬので詳論を省き、昭和八年發掘された樂浪古墳貞柏里第二二一號羨道部より發見された甕棺の方が、より大きな關連を持つものであろう。<sup>註3</sup>これは明に漢代の磚築墳と同時のもので、丸埴の口を合せたもので小形であるから幼兒埋棺と思はれる。



樂浪に於ける墳墓が輝かしい漢代文化を具象しているのに對して、封土内に寄生した甕棺は、それを獨立の葬法として磚築の墳墓に對比すれば如何にも貧弱な感を受ける。梅原博士が引用されて以來屢々引かれる大平廣記の文

「又天監五年丹陽山南得瓦物。高尺圍四尺。上銳下平。蓋如合焉。中得劍一。甕具數十。時人識莫。沈約云。此東夷器也。葬則用之代棺。此制度準小則隨當時矣。東夷死則坐葬之。武帝服其博識。語在江右雜事」

によつて、中國に於ても合口の「瓦物」が存在し、中に劍と甕具が發見されて之を東夷の葬法と論じている。沈約の説はその行はれた年代を言明してはいないが、當時中國に盛行した葬法とは云い難いであらう。漢代では早く滿洲旅順牧羊城の如き合せ甕式のものもあるし、ここにあげた樂浪古墳も漢代の遺跡である所から、漢代に所謂東夷地方に甕棺葬習俗が行はれていた事實を物語るものであらう。

一面中國に於ても、河南省易縣の故址より同類のものが發見されているので甕棺葬法の東夷の習俗に限定されるが疑問であるが、日本の甕棺に對比してみれば南鮮の金海、東萊の例が最も近く、他の實例は觀念的に合口甕棺である點に於ては合致するも、器形の點については猶多少の差異が認められるであらう。金海の如きは一衣帶水の近い地點にあり、この地が海を渡つて北九州と同一文化圈帯に含まれた時期がある事を物語つてゐる。南鮮の一角が古墳時代に於て鹿角製刀裝具に直弧文を持ち、勾玉が兩地域に濃厚に分布する關係と同類に見られるであらう。

註

1 榎本龜次郎氏「金海貝塚、其の新發見」考古學第六卷第二號

同「金海會峴里貝塚發見の甕棺に就て」考古學第九卷第一號

2 「東萊の甕棺出土」青丘學叢第二號彙報欄

3 朝鮮古蹟研究会「古蹟調査概報」樂浪古墳昭和七年度

4 東亞考古學會「牧羊城」東方考古學叢刊第二冊

## 六、結 語



從來論じ古された甕棺の起源問題ではあるが、中には新しい資料によつて見解の更迭を要求される場合もあり得るのである。私は乏しい材料ではあるが彌生式甕棺の起源を論ずるに當つて、その早期の様相を把握したい爲に遠賀川式甕棺を額蒐してみた。而してこれ等の甕棺が縄文式晩期に發見される甕棺並びに、半島に於ける甕棺のあるものに類似點を見出したのであるが、この三者の關連に就いては從來色々の見解が提起され、殊に朝鮮↓彌生↓縄文という方向に傳播經路を考ふる論者と、反對に朝鮮と切り離して彌生甕棺の母體なり祖形を縄文甕棺に求めんとする論者が對立している觀がある。私はその何れにも斷論を下さずして可能と思はれる假説を時折り述べて來たのであるが、再び三者に共通する小形棺に就いて考察を續ける事としよう。即ちこれ等の甕棺が小兒、嬰兒或は胎兒の埋葬に利用された事は隙である。この風習は同時に或る場合では甕棺と同一場所に於て築營された箱式棺の大きさを對比しても小形棺が目立つている。例えば藤崎、鐘ヶ崎、犀川、朝鮮金海に於ける如き、成人を容れるに足る石棺と共にそれよりも多數の幼兒屍体しか容れられぬ小形石棺を見るのである。嬰兒幼兒の死が原始人に與える惜愛の情から發する信仰行事は、世界の各地にその土俗例があり、古代遺物からみて小形甕棺の出現も、必ずしも東亞の一角にのみ出現した事象ではなかつた。南鮮の一角を含めた北九州の甕棺が早期に於て未だ乳幼兒の甕の範圍を出なかつた點は、必ずしも大陸文化の強い刺戟によつて發生した他力的なものと解する必要はないかも知れない。然し石棺に於ては既に大人の埋葬と幼兒のそれが遺跡に於て共存している點から、既に成人屍体の處理に同様の構想がめぐらされた事を物語るものではあるまいか。さすれば甕棺に於てもやはり同じ傾向によつて成人屍体の處理に甕を用うる意向が生じて來るのも當然と云はなければならぬ。然しその意志が實現をみるに至る迄には、須玖期の大形土器製作技法の發達を俟たなければならなかつた。而してこの盛期の甕棺遺跡に於てさえ小兒棺の存在は全く消失してしまつた譯でなく、時折り相遇するというより廣域の墳墓地域を調査すれば、殆んどこの小形甕が發見されるといつてよい程である。とは云え小形小兒甕棺葬より大形成人葬に移行して行つた過程は充分に辿れよう。北



九州に於ける諸々の甕棺遺跡はまさにこの移行の過程を示しているものと云はれよう。

追記 上記成稿後大分縣福宜野の縄文式甕棺と、福岡縣京都郡本庄の遠賀川式甕棺の實例圖が夫々送付されたので、こゝにその要項のみを追記することとする。前者は胎土中に長石、石英、雲母の細粒を少量含み、甕棺の中より白齒三本（右第三下、右第二下、左第二上各々一本宛）を出したとゆう。速見郡豊岡町一ノ宮左内氏（齒科醫）の鑑定によれば、十才以上二十才以下の年齢に相當する由である。少年の屍體とすれば屈葬位をとらねば容らぬであらう。一―二度の傾斜でほとんど垂直に埋藏され上甕の上邊より平石一個を掘り出した事を最初發見した村人が注意したとゆう。猶同じく直入郡牧口村牧口小學校校庭からも御領式甕棺が出土し、人骨若干を採集し、現品は竹田町北村清士氏が所藏されていることも聞いているので、機を得て實査し度いと思つてゐる。

犀川の甕棺は直立に近く、約十五度の傾斜を持ち、上甕は腹部が細片となり復原不可能であるから高さは正確に圖示し得ないと斷つてある。圖は機を見て追補しよう。

實例圖並に説明書を寄せられた大分大學佐藤曉君と小倉高校田頭喬氏の好意を深謝する。



Some Notes on the Burial Urns (Part II)

—The Burial Urns of *Ongagawa* Style and their Origins—

by T. Kagamiyama

The burial urns of *Yayoi* style 彌生式 which have been developed in northern Kyushū originate in ones, early style of which is called *Onga-*



*gawa* style 遠賀川式. The burial urns of early periods have characteristics that they are only in few cases found in groups and that all of them are so small-sized that they can receive no one but infants. The burial urn of *Jomon* style 縄文式 is older than that of *Ongagawa* style, and has the same features that it is equally small-sized. In the southern parts of Korea we can find several ones resembling the burial urns of *Yayoi* style, which seem to be the prototype of Japanese ones. I collected several burial urns of older *Yayoi* style and investigated whether their origins could be traced back to the burial urns of *Jomon* style and of Korea.